

帰還兵 深い傷



高さ十数メートルのクレートンにつるされた巨大な星条旗の下を、200台を越す大型のオートバイが駆け抜けた。9月末、米中西部ミズーリ州カンザスシティの公園。サンダラスと華ジャンに身を固めたライダーたちを、星条旗を手にした人々が迎えた。

帰還兵とその家族らがオートバイで集結すると、「塵やしの塵」と車体に書かれた大型トレーラーが登場。荷台の

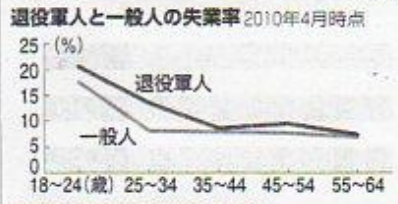
罪が問われ、ベトナム戦争の写真や兵士の手紙などの展示が現れた。ベトナムで戦った米兵たちをたたえる内容だ。「ベトナムからの帰還兵は社会に温かく迎えられるなかった。イラクやアフガニスタンの帰還兵に同じ思いはさせたくない」。大型バイクで駆けつけたアマンダ・チェリーハウスさん(43)は言った。

無関心で、夫妻に救いの手を差し伸べてはくれなかった。「彼らを守るには、我々が人間の盾になるしかない」。アマンダさんは仲間とバイクに乗り、抗議デモを戦死者の葬儀に近づけない活動もして

迫る中間選挙「二つの戦争」見てほしい

いる。葬儀が抗議グループに襲われる事態が多いためだ。

戦争で大けがをした若者たちが、社会の目を戦争に向けてよこしている。米カンザス州アチソンに、イラク帰還兵のスコット・ステイブンスさん(26)を訪ねた。



米議会議員の軍経験者の推移

年	上院	下院
1969~71年	69人	329人
1979~81年	58人	240人
2008~10年	25人	95人



麦畑が広がる戦地帯にある自宅の周囲に、スコットさんは汗足跳びで現れた。むき出しの左足はひざ下が失われ、左手首は直角に曲がっている。傷跡の生々しさにたじろぎ、思わず目をそむけた。彼の目だけをみつめて話そう。そう思った記者の心を見透かすように、「目をそらす

わけとは体表面の66%におよび、一部で骨に至った。左足のひざ下を失い、神経を失った左手は手首のところで直

角に曲がったままだ。生存率5%という重傷から生還した今、米国のために役に立ったことを誇りに思っている。ソファの背後には、入院先でブッシュ前大統領と撮った写真と「尊敬と感謝を込めて」という言葉が、星条旗と一緒に大切に飾ってあった。だが、「二つの戦争」からの出口を急ぐオバマ大統領の話が及ぶと冷静さを失い、言葉が荒くなった。「自分たちの犠牲は何だったのか。オバマは何も分かかってない」

スコットさんと母親のルアナさん(45)は今年、重度のやけどを負った帰還兵のグループを立ち上げた。名前は「テンプル・ド・スチール(鍛鉄)」。戦争の傷から生還した兵士らは「火に鍛えられた鉄」だという思いを込めた。金米各地から15人が集まり、写真集もつくった。講演会を開くことを目指している。

「傷ついた兵士はこの国に腐るほどいる。でも、人々は自分のごときか考えず、気づくことさえない」とスコットさんは語気を強めた。「中間選挙で、我々を代弁してくれる政治家もいない。米軍最高司令官のオバマ大統領なんて、軍の経験すらないんだから」。そう話すルアナさんの表情は険しかった。

中間選挙を来月2日に控える米国で、米兵約5千人の命を奪った「二つの戦争」は、話題に上らない。世論の約6割は戦争に反対し、年間十数兆円を費やす戦争を「戦う価値がない」と切り捨てている。そこには、危険を承知で戦地に向かう米兵たちと、米国民社会との目に見えない溝がある。

(アチソン(米カンザス州) 11 露月洋詞) 2面に続く

無職、酒浸り「自殺考えた」

18〜24歳退役軍人、失業率21%



1面から続く

かに、バーやビリヤード台があり、相談相手がいるこの場所だけが心のよりどころだ。

3月に帰国後、100近い求人に応募した。心的外傷後ストレス障害(PTSD)はあるものの、仕事ができないほど重いわけではない。歯科助手をする妻の収入に頼る生活早く抜け出したい。「呼んでくれるなら、すぐに軍に戻りたい」とつぶやいた。

同じ団体に所属する男性(30)は、17歳で米軍に入り、海外に14回も派遣された。だが、イラクで大けがをして退役後は、無職だ。酒浸りになって友人を殴ったり、自暴の衝動に駆られたりすることもある。この建物の扉に残る無数の弾痕を記者に見せて「去

と軍との距離が開いていると指摘する。「ほとんどの経営者は兵役の経験がなく、身近に軍人がいない。軍で何が行われ、帰還兵がどんな価値をもたらすが、分からない」。自動車や機械整備などの技術を備え、集団行動の訓練を受けた兵士がいかに役立つのか。かつて、多くの帰還兵に働く場を提供していた軍事産業

米軍の志願兵制度と徴兵制度

1973年に徴兵制度が廃止され、現在は志願制。兵役につくと、大学進学の特典を受けられる。外国籍の場合は米国民権を得るうえで有利になったりする。このため、志願制になってから貧困層や移民の入隊が増えているとの見方がある。米軍では中流以下の家庭の出身者が7割以上を占めるが、国防総省は社会全体の割合を反映しており、偏りはないと反論している。



戦場で大やけどを負った帰還兵らのグループ「テンパード・スチール」のメンバーたち。創設者のスコットさん(左奥)と母のルアナさん(中央)＝ルアナさん提供

「米国民にとって、戦争は個人の生活に影響をもたらさない、導く不快なニュース

社会と隔絶「誰かが兵役」

軍経験者の割合、続く減少傾向

「米国民にとって、戦争は個人の生活に影響をもたらさない、導く不快なニュースに懸念を示した。」(9・11

止されて以降、米国民に占める軍経験者の割合は減少傾向が続く。ベトナム戦争への従軍経験者が340万人に上るのに対し、イラクやアフガンの経験者は220万人。自ら志願した兵士が繰り返した戦地に赴いている。

主な戦争時の派兵数と死者数	死者数	負傷者数	
朝鮮戦争 (1950～53年)	179万人	3万3739人	10万3294人
ベトナム戦争 (1964～75年)	340万人	4万7434人	15万3303人
湾岸戦争 (1990～91年)	69万人	148人	467人
アフガニスタン、イラク戦争 (01年～)	220万人	4490人	1万7240人



(退役軍人省など調べ)

歴代大統領で「帰還兵」と言えるのは、2次世界大戦で太平洋戦線に従軍したブッシュ父が最後だ。米議会議員の軍経験者も大減。ベトナム戦争中の70年には上院議員に計398人の軍経験



を紹介する博物館には、第2次世界大戦前から操業するロッキード・マーティン社の工場の歴史を紹介するコーナーがあった。工場では、かつてB29爆撃機がつくられ、今は最新鋭のステルス戦闘機F22を製造中。地元の特産だ。だが、F22は、オバマ大統領の方針でやがて生産中止になる。工場の労働組合を訪ねると、デニス・レイクストロム委員長が「非常にがっかりした」と言葉少なに語った。1980年代はじめに約3万人いた労働者は3千人台に減り、帰還兵に職場を提供する余裕はない。委員長は10月初

10月初め、オバマ大統領の母校であるニューヨークのコロンビア大で、「兵役と社会」と題されたシンポジウムがあった。主催は同大の学生議会。同大はハーバード大、プリンストン大と並ぶ一流大学。米東部の一流大学群アイビーリーグなどから軍に進む学生は少ない。これらの大学出身者が多い米政府や米議会と、軍部との人脈が薄くなっていくことへの懸念が、シンポジウムの背景だ。

国際関係記事